

## 第三回 後期新羅と渤海

### 1. 後期新羅の政治

高句麗と百済を滅ぼし、大同江以南を領有することとなった新羅は、新しい政治制度を作り上げた。まず百済と高句麗の官位をもつ者を格下げして新羅の官位に編入し、加えてそれまで京と地方で別れていた官位をまとめて、全ての官位を十七の等級に一本化した。新羅の官位制度は、骨品（골품）制度<sup>1</sup>と呼ばれる身分制度と連動しており、第一等の伊伐漚（이벌찬）から第五等の大阿漚（대아찬）までは真骨（진골）身分である王族しかなれなかった。六頭品は第六等の阿漚（아찬）まで、五頭品は第十等の大奈麻（대나마）まで、四頭品は第十二等の大舎（대사）までと、その階級によって昇進の限界が設けられていた。

また全国の行政制度も整備した。全国を九つの州と五つの小京に分け、旧高句麗と旧百済にはそれぞれ三州を置いた。軍隊も九個の誓幢（서당、中央軍）と十個の停（정、地方軍）に編成され、高句麗人、百済人、靺鞨（말갈）人<sup>2</sup>の軍団を設けた。中央では官僚制度を整え、王権の執行機関である執事部（집사부）を中心に十三の中央官庁を作り、執事部の長官である侍中（시중）が政治を取り仕切った。

こうして新羅は拡大した領土を統治するために、合理的な中央集権体制を整えた。さらに官僚制度の整備と並行して682年に官吏養成のための国学（국학）という教育機関を作り、八世紀末には読書三品科（독서삼품과）という官僚任命制度を作り儒教の知識による人材登用を図った。しかし真骨と呼ばれる王族による権力の独占は続き、地方豪族の不満を呼ぶ原因となった。

九世紀に入ると王位争奪によって政治は乱れ、地方に根拠地を置いた反乱が相次いだ。822年、熊川（웅천）州都督の金憲昌（김헌창）は父が王位争奪に敗れたことを恨み、長安（장안）国を名乗って反乱を起こした。また、新羅の大商人<sup>3</sup>である張保臯（장보고）は莞島（완도、全羅南道）に海軍を備えた貿易拠点として清海鎮（청해진）を設けていたが、王位争奪で協力した神武王（신무왕、在位839）の裏切りに怒り反乱を起こした。張保臯はこの当時、唐・新羅・日本を繋ぐ海上貿易路を支配し、清海鎮に一万名の海兵を置き、海賊を一掃するほどの強い勢力を持っていた。これらの反乱は鎮圧されたが、新羅の国力は確実に衰亡していった。

しかし、慶州の人々は地方の疲弊を省みず、大規模な土木事業を行い、雁鴨池（안압지）という壮麗な庭園や巨大な寺院、宮殿を建設した。九世紀末に至ると、王族の享樂が国家財政を圧迫し、農民に対する収奪が強化され、国勢は取り返しがつかない不安に陥った。

---

<sup>1</sup> 聖骨と真骨の王族と、六頭品から一頭品までの頭品で構成されていた身分制度。その内、六頭品、五頭品、四頭品が貴族階級であり、それ以下は京に住む平民階層であった。後に聖骨は滅び、真骨だけが王族となった。

<sup>2</sup> 古代、朝鮮半島北方からロシア沿海州にかけて居住したツングース系諸部族の総称。粟末・伯咄・安車骨・扈涅・号室・黒水・白山の七部をはじめ、多くの部族に分かれていた。

<sup>3</sup> 後期新羅では、唐や日本との貿易が活発化し、海上交通を牛耳った新羅商人は大きな力を蓄え、中国に新羅坊と呼ばれる居留地を形成した。張保臯は登州に法花院という新羅人の寺を建て、貿易の拠点とした。また彼は唐への留学生を助け、日本僧円仁の帰国を援助するなどしている。

土地を離れた農民は武装して「草賊」となり、また豪族の下で私兵となった。

889年、尚州（慶尚北道）で元宗（원종）と哀奴（애노）による農民反乱が起こると、各地で反乱が相次いだ。896年には赤袴（적고・붉은바지）を穿いた農民たちによる農民暴動が、首都の慶州にまで攻め入る事態となった。こうして新羅はもはや地方を支配するだけの力を失ってしまった。

各地の反乱はやがて国を名乗るほどに成長した。甄萱（견훤）は武珍州（무진주、光州）で自立した勢力を持ち、900年には後百濟（후백제）と称し建国を果たし、完山州（완산주、全州）に都を置いて全羅道と忠清道を支配した。中部地方を占領していた北原（북원、原州）の梁吉（양길）の部下であった弓裔（궁예）もまた、901年、梁吉を追放して、後高句麗（후고구려）を建国した。後百濟と後高句麗は、新羅の支配に不満を抱いていた旧百濟・旧高句麗地方の住民の支持を受け勢力を増大し、朝鮮半島は再び三国に別れる様相を呈した。この時代を後三国時代と呼ぶ。

弓裔は高句麗の復興を宣言し、後高句麗の領土を大同江から尚州に至るまで拡大した。また国名を904年に摩震（마진）と改め都を鉄円（철원、江原道鉄原）に移し、911年には再び国名を泰封（태봉）と改め、弥勒仏を自称し、宗教的權威によって国内をまとめようとした。しかし、国土の拡大に比べ疲弊した社会の改革を果たすほどの能力は無く、部下たちは彼の専横に不満を抱き、918年、部下であった王建（왕건）によって追放された。

王建は国名を高麗（고려）とし、都を松岳（송악、開城）に置いた。一方、新羅は慶州周辺をようやく治める小国家となり、927年には後百濟の攻撃を受けて景哀王（경애왕、在位924-927）は自殺に追い込まれた。935年、王建は新羅の投降を受け入れ、翌年、後百濟を攻撃して征圧し、後三国を統一した。

## 2. 後期新羅の文化

大きな国力を持った新羅では、儒教が中央集権体制を支え、仏教が宗教哲学の面から貢献し、貴族的な文化が花開いた。高い水準の漢文知識を蓄えた学者が現れ、新羅の政治・文化に貢献した。

薛聡（설총）は新羅語を漢字で表す方法（後の吏読、이두）を集大成した。また崔致遠（최치원）は唐で科挙（官僚登用試験）に合格し名声を得て帰国後は政治改革を主張して国王に意見を述べた。彼らは骨品制度に束縛された六頭品階級から輩出され、高い実力を持ちながら上位の官位に登れない身分制度の矛盾を実感していた。しかし、新羅の強固な身分制度は彼らの昇進を阻み、崔致遠は儒仏道の三教を備えた知識人として尊敬されながらも晩年を放浪の内に終えた。

七世紀以後、唐へ留学する者が増え、仏教はかつての護国仏教から高度な理論を備えた宗教哲学へと発展した。華嚴宗（화엄종）を開いた義湘（의상）は宇宙の万物は調和する関係にあると説き、新羅仏教界の中心的存在となった。また法性宗（법상종）を開いた元曉（원효）は人々の融和を図り、こだわりを棄てた自由な精神を説いて民衆の教化に貢献した。

仏教の隆盛は慶州の仏国寺（불국사）や皇龍寺（황룡사）などの大規模な寺院建築を実現させた。751年に建立された仏国寺には釈迦塔（석가탑）と多宝塔（다보탑）が建てられ

広大な空間に仏教的世界観を表現し、その背の山腹には石窟庵(석굴암)という人工石窟寺院が設けられた。これらの寺には他国には見られない高度な技術で作られた巨大な梵鐘が備えられており、奉徳寺(봉덕사)にはエミルレの鐘と呼ばれる十二万斤の銅鐘が現存している。また、仏国寺釈迦塔の内から発見された『無垢浄光大陀羅尼經』(무구정광대다라니경)は世界最古の木版印刷物とされ、当時の仏教文化が高い水準に至っていたことが窺える。

また、漢文学だけでなく、自国の言葉による文学作品も生まれた。漢字の音と訓を組み合わせた郷札(향찰)によって書き記された郷歌(향가)は888年に『三代目』(삼대목)という歌集にまとめられた。残念ながら『三代目』は現存しないが、『三国遺事』に十四首の郷歌が記載されており、当時の人々の心情を今に知ることが出来る。その内、新羅の僧侶であった月明(월명)師が亡き妹のために作った郷歌「為亡妹宮齋歌」(위망매영재가)が以下のものである。

生死路隱 生死の路は  
此矣有阿米次盼伊遣 此に有ることをためらって  
吾隱去内如辞叱都 吾は去るとの辞すら  
毛如云遣去内尼叱古 できないままに去るのだろうか。  
於内秋察早隱風未 ある秋の早い風に  
此矣彼矣浮良落尸葉如 此こ彼しこ落ちる葉のごとく  
一等隱枝良出古 一つの枝より出でて  
去奴隱処毛冬乎丁 去る処を知りがたし。  
阿也, 弥陀刹良逢乎吾 ああ、弥陀刹<sup>4</sup>に(妹と)逢う吾は  
道修良待是古如 (仏の)道を修めて(時を)待つ。

### 3. 渤海

新羅が唐の勢力を排斥し大同江以南を領有したのに伴い、旧高句麗の故地に新しい国が生まれた。696年、營州(中国遼寧省朝陽)に強制移住させられていた高句麗の遺民は、契丹人、靺鞨人と共に唐に対し反乱を起こし、契丹人の長である李尽忠が營州城を陥落させると、高句麗遺民は靺鞨人と共に東へと向かい旧高句麗の領土を取り戻していった。唐は大軍を派遣し、これを討伐しようとした。しかし、高句麗遺民の軍勢を率いた大祚榮(대조영、高王、在位698-719)が天門嶺の戦闘で唐の討伐軍を撃退し、698年、東牟山(동모산、中国吉林省敦化)で建国を宣言し、国名を震(진)国と名乗った。

713年に震国は渤海(발해)と国名を改め、次第に領土を拡大し、周辺の靺鞨諸部族を支配下に置いていった。強い勢力を誇る渤海に危機感を抱いた唐と新羅は、732年に西南両面から攻撃を行ったが、大きな成果を挙げられず、やがて渤海は北方で高句麗以上の広大な領土を支配するに至った。渤海は南の新羅と対抗するためにその背後の日本へ頻繁に外交使節を送り<sup>5</sup>、良好な関係を結んだ。また北の突厥<sup>6</sup>(とっけつ、とっくつ)にも親しく外交

<sup>4</sup> 阿弥陀如来の住む西方浄土。

<sup>5</sup> 727年から919年までの間に行われた両国間の公的な使節派遣は、渤海からは33回、日本からは13回に及び、貿易活動や文化交流が行われた。

使節を送り、唐の侵略を牽制した。やがて八世紀になり唐や新羅との関係が好転すると、両国とも活発な貿易を行い、馬や陶磁器、毛皮などを輸出するようになった。

渤海の政治や文化を主導していたのは高句麗人であり、その領域は朝鮮半島北部から松花江流域、現在のロシア沿海州に至る広大な領土を有していた。渤海は広汎な領域と多様な民族をまとめるため、高句麗以来の制度を取り入れつつも、新しい統治方式を模索していった。

渤海は官僚制度を整備し三省（政堂省・中台省・宣詔省）六部（忠・仁・義・礼・智・信）を設け、政堂省の長官大内相（대내상）が政治を取り仕切った。首都の上京龍泉府（상경용천부）には大きな都城を築かれ、碁盤目の整然たる都市が建設された。また多くの寺院を建設し、仏教文化が発展した。

また渤海は高い文化水準を持っていた。儒教的な政治思想の下、国家の教育機関である胄子監（구자감）では儒学教育が行われ、また文籍院（문적원）と呼ばれる図書館が設けられていた。また第三代国王大欽茂（대흥무、文王、在位737-793）の王女貞恵公主（정효공주）の墓誌は、駢儷文（べんれいぶん）を楷書で刻み、高い漢文学水準を持っていたことがうかがえる。また日本へ送った使節が残した詩は今も日本の文書に伝わっており、高い評価を受けている。

やがて第十代国王大仁秀（대인수、宣王、在位818-830）の時代に大きく栄え、行政制度が整備され、九世紀初めに「海東盛国」と呼ばれる全盛期を迎えた。渤海は高句麗の後継者であることを自認し、高句麗の文化を更に発展させた。その後926年、契丹<sup>7</sup>の攻撃によって渤海は滅んだが、その上流貴族の多くは高麗へ亡命し、後にその故地を回復しようとする意識は高麗・朝鮮へと継承されることとなった。

---

<sup>6</sup> 6～8世紀、北アジアから中央アジアを支配したトルコ系部族を中心とする遊牧民国家。

<sup>7</sup> 後の遼。モンゴル、中国東北部から華北にかけて支配した契丹人の王朝。916 - 1125年。